

研究成果の広報にあ たって生じうるリスクと、 そのマネジメントに対す るURAの役割

第1回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラム

大学における研究リスク・マネジメントと研究促進

—課題の全体構造とデータと成果の取り扱いに焦点をあてて—

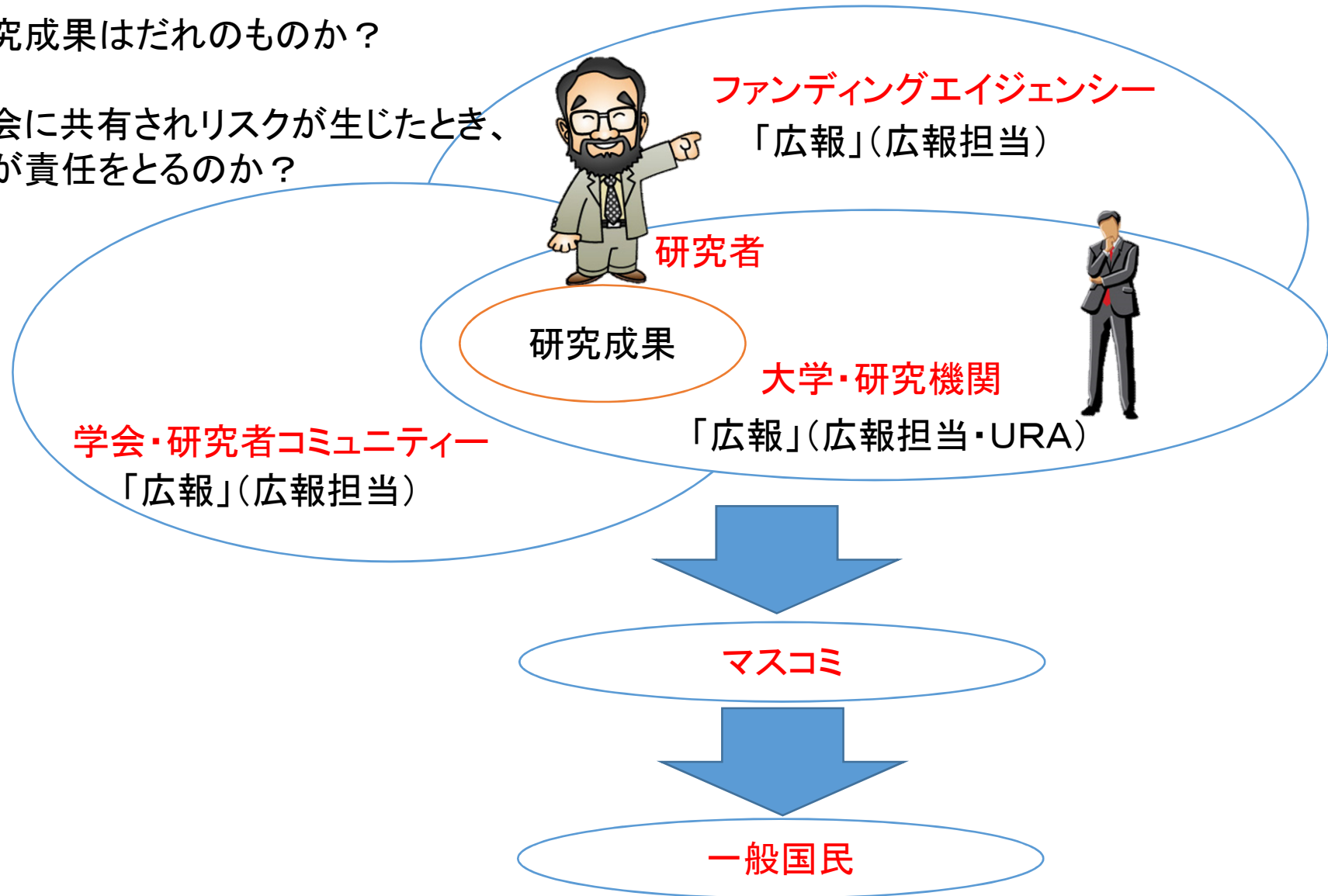
自然科学研究機構 研究力強化推進本部
特任教授 小泉 周

研究成果広報におけるconflictの構図

研究成果はだれのものか？

↓

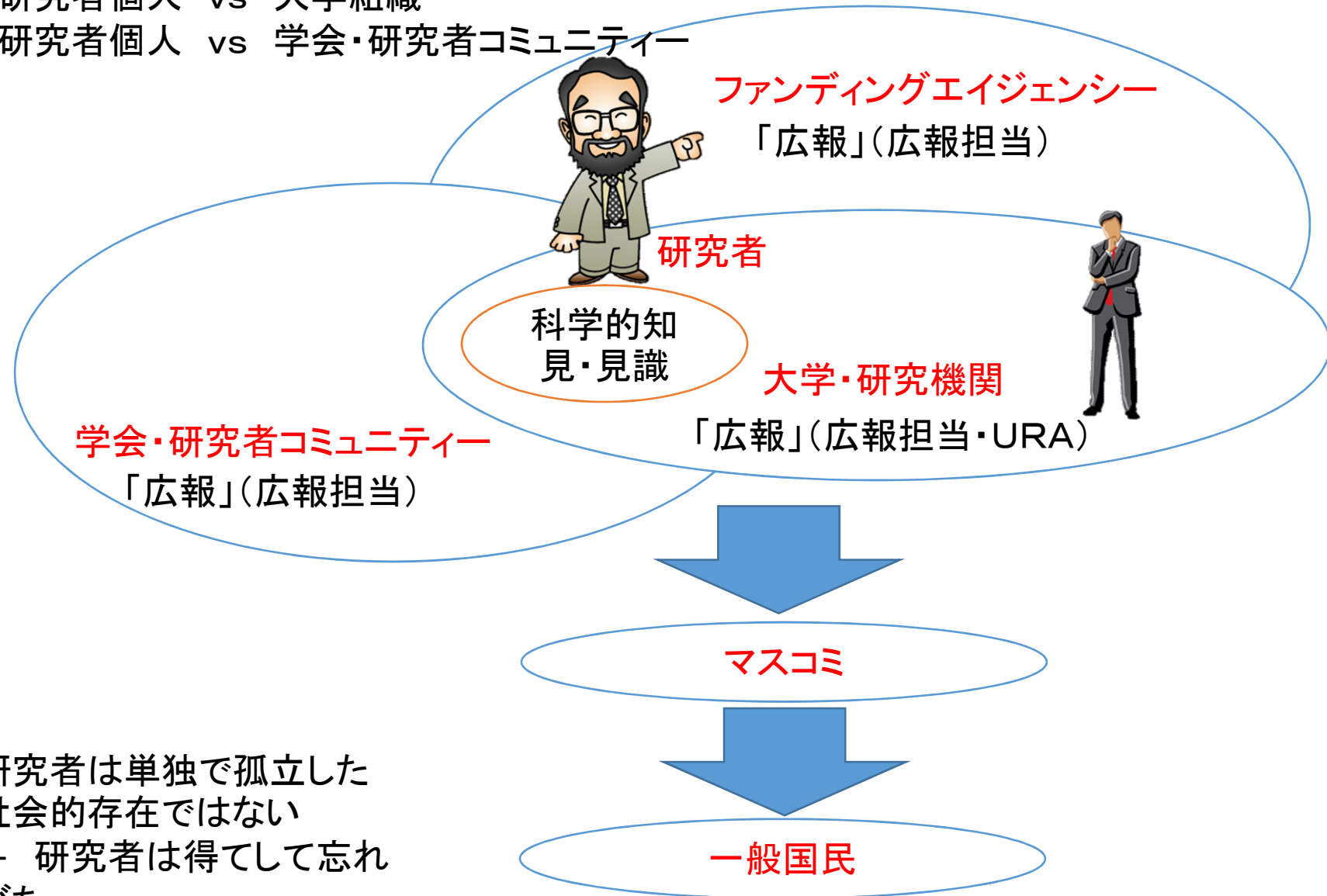
社会に共有されリスクが生じたとき、
誰が責任をとるのか？



研究者個人の科学的知見・見識の表明は？

研究者個人 vs 大学組織

研究者個人 vs 学会・研究者コミュニティー

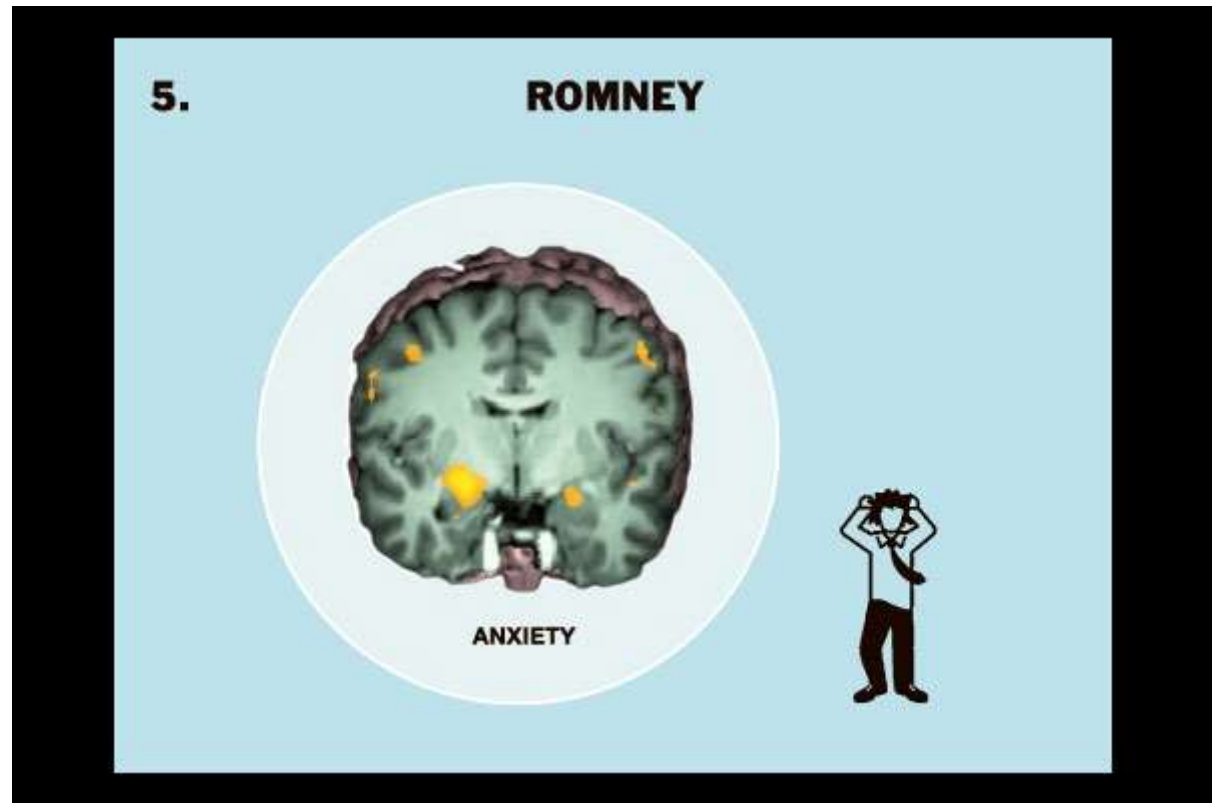


研究者は単独で孤立した
社会的存在ではない
← 研究者は得てして忘れ
がち

例

- 2007年11月11日 New York Times
“This Is Your Brain on Politics”

- ・アメリカ大統領選挙予備選前
- ・まだ誰に投票するか決めていない有権者20名を被験者とする
- ・候補者に対する反応をfMRIで記録
- ・ミットロムニーの写真を見たとき、被験者の扁桃体が活性化（血流量が上昇）
- ・脳科学者は、有権者はミットロムニーに不安を覚えていると結論



逆向きの推論の危うさ

- Aという心の状態にあると、脳のXという部分が活性化する
- あるYというテストをしたところ、脳のXという部分が活性化した。
- つまりYによってAという心の状態が生まれた。

Conflictはどこにあるのか？

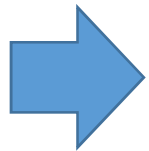
ある特定の意図をもって、研究者個人が研究成果を国民に訴えようとしているとき、その責任はどこにあるのか？

- 学問の自由 vs プロパガンダ
 - 研究者 vs 学術コミュニティー（ピアレビュー）
 - 研究者 vs 組織広報
 - 研究者 vs マスメディア
-
- 学者がある一定の意図をもってプロパガンダをはじめたら結構とめられない

責任の蒸発？誰に責任があるのか？

- 大学広報 vs 学会広報
- 研究者 vs 広報
- 広報 vs メディア

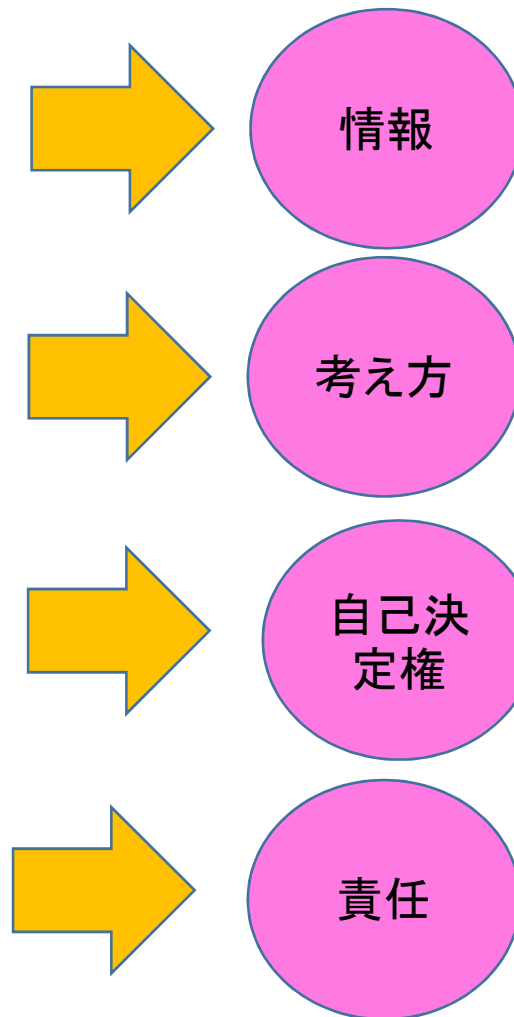
責任をなすりつけあって、誰も責任を取らない



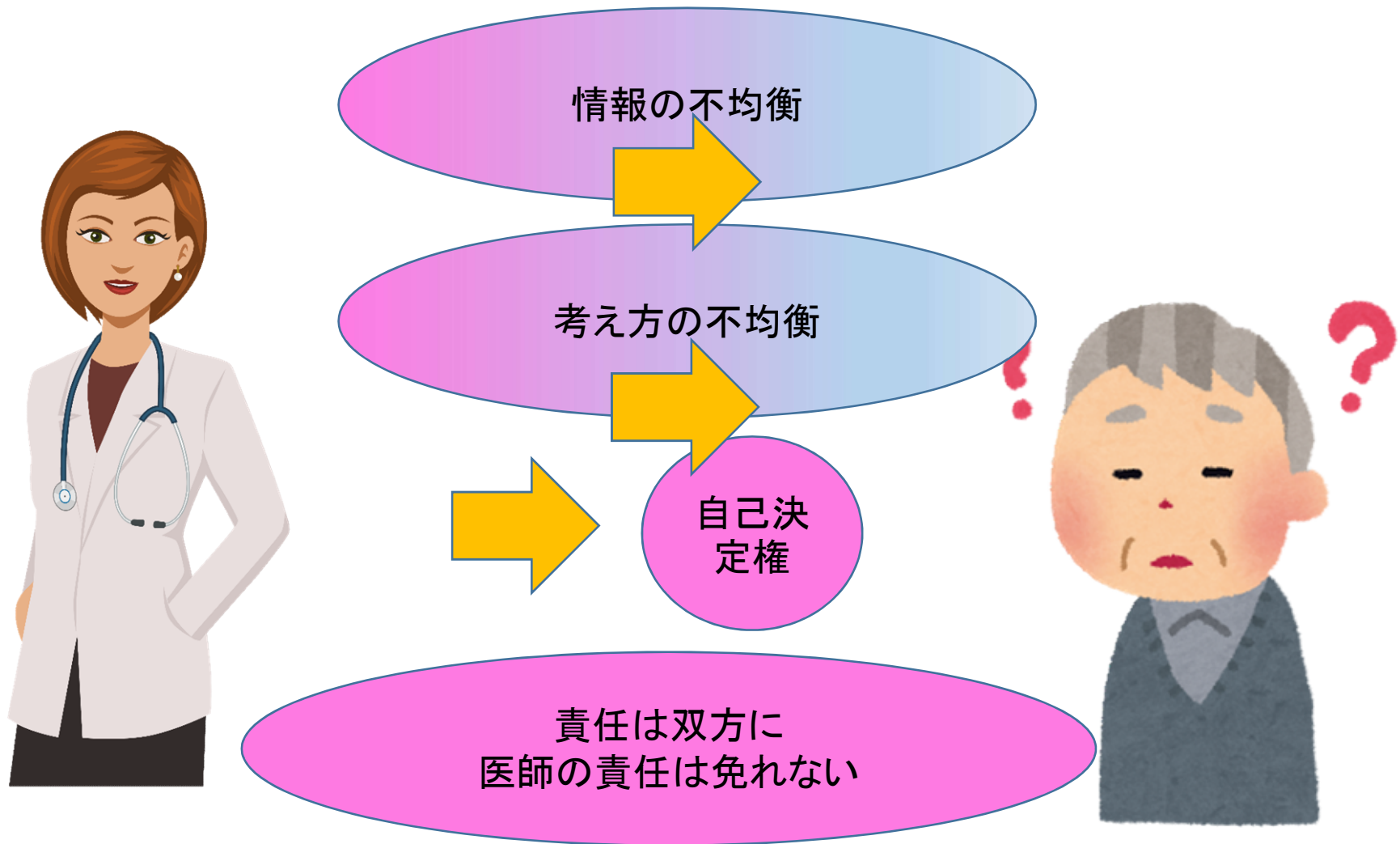
立場が対等でない場合に、
一番立場の弱いものに「責任」が
押し付けられる（悲劇）

若手研究者だったり、広報担当者だったり。。

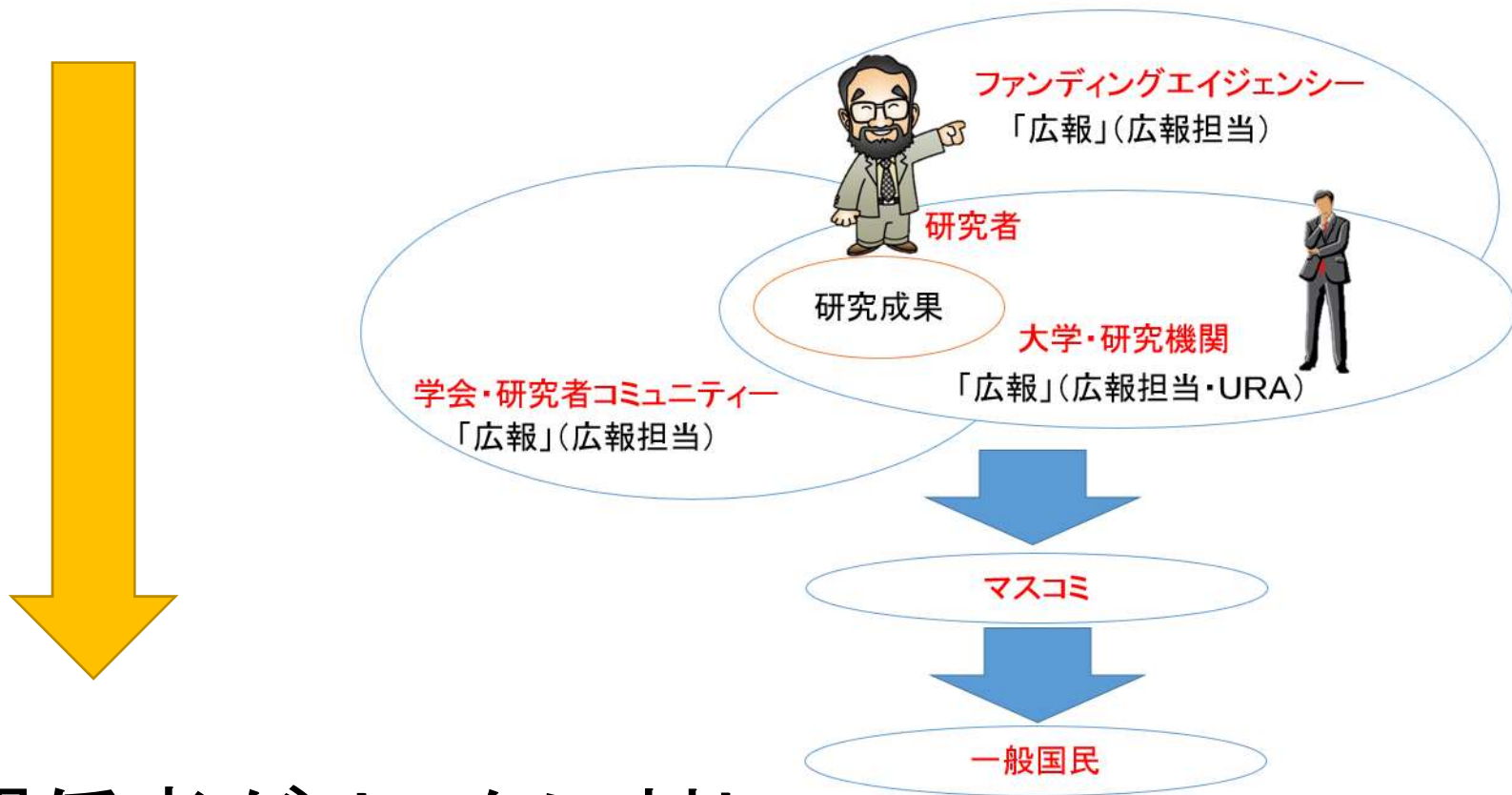
インフォームドコンセントと『責任の蒸発』



インフォームドコンセントと『責任の蒸発』



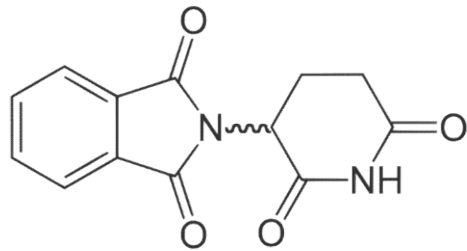
Conflictが生じているセクター間で、実は、
ボールはお互い持ち合いつづける



全関係者がリスクに対して
「責任」を共有している

科学的不確定性(※実験条件の制約)を予見する 科学的成果の適用範囲の限界

例 サリドマイド



睡眠・鎮静剤

催奇形性



マウス

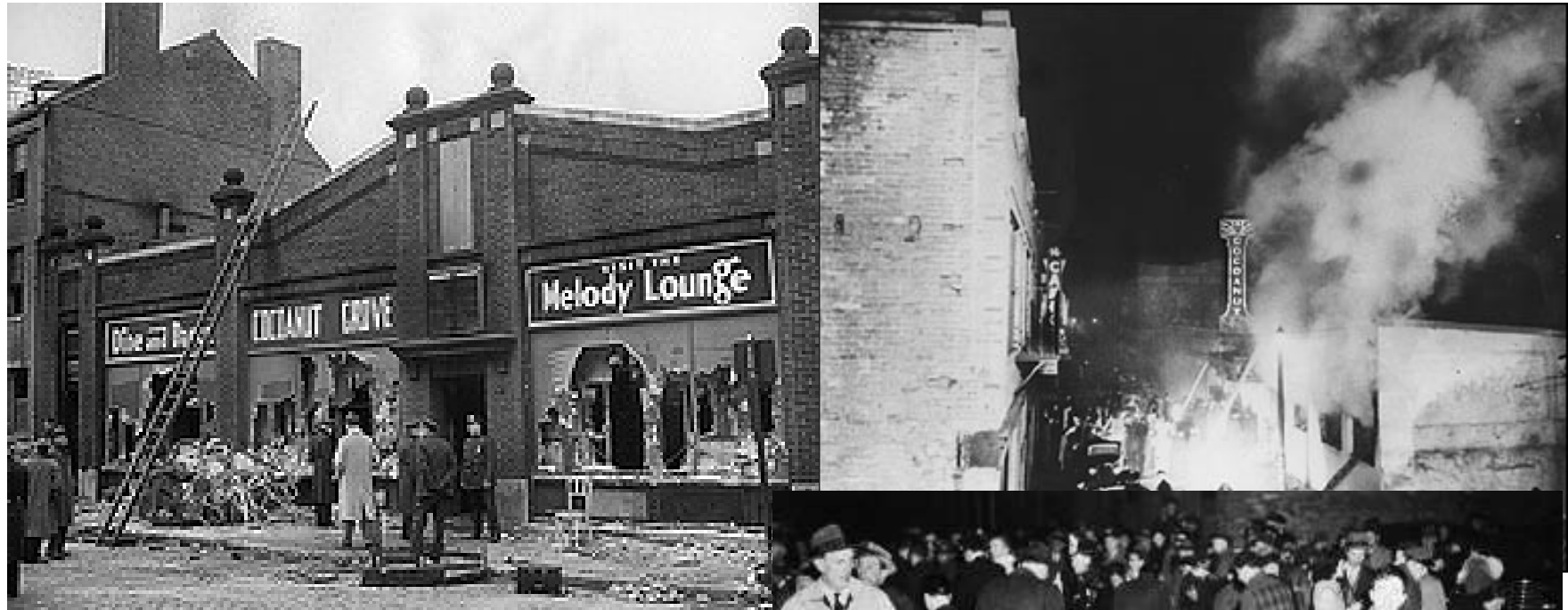


ヒト(胎児)



より厳しいルールづくり。ガイドライン。
しかし、unexpectedをexpectすることは不可能
→ リスクをシェアするという考え

Coconuts Grove Fire in Boston



1942年11月28日、ボストンの繁華街、シアター・ディストリクトのバー"Coconut Grove"で起こった火災は、逃げ遅れた客たち千人超を巻き込んだ。バーの中は暗くまた出入り口が狭かったため、多くの人が逃げ遅れ、火災に巻き込まれたのだ。死者は482人にも上ったが、それ以上に重度の火傷を負うものが多かった。

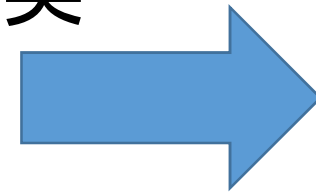


火傷の新しい治療法のイノベーション



- それまでの火傷の治療のスタンダードは、火傷を負った患部を強酸を使って焼いてしまうというものであった。50%の死亡率。
- MGH助手だったFrancis Mooreの挑戦。救急車で大量に運ばれてくる火傷患者に対して、彼らは強酸は用いずに、患者の患部にゼリー状のクリームを塗りつけ保存する方法をとった。
- 多数の患者を同時に治療可能。死亡率0%を達成。

多くの患者が送られてくるという現実
既存の治療法への厳しい目
医師としての経験と直感



火傷の新しい治療法のイノベーション

最終的にFrancis Mooreが責められるべきものではない

社会的に責任を共有する
社会的な許容度の構築が必要

リスクをシェアし、新しいチャレンジ
を許容する

→ イノベーションへ

責任をシェア。その上で、
それぞれの役割は？

